

単元を通して ICT を活用！英語の基礎力の定着から振り返りまで

6年生 This is my town. の単元から

昭和女子大学附属昭和小学校 英語科主任 幡井 理恵

キーワード：英語力向上、教科連携、考えの可視化による修正と評価

実践の概要

英語によるコミュニケーションの機会が限られている児童にとって、ICT の活用は不可欠である。英語の技能を身に付ける、自らの考えを可視化しながらまとめる、自分の作ったものを見てふりかえるなど、単元を通して、様々な場面で ICT を効果的に活用した実践を報告する。

1. 目的・目標

(1) 「多様化する児童への対応＝個別最適化」

本校では、25 年ほど前から英語を教科として指導しており、4 技能の指導を通して、全体的な児童の英語力の向上が見られるようになってきた。しかし昨今、日常生活で英語に触れる頻度の異なりによって、児童の英語力格差が顕著になってきている。コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を養うためには、教師と児童、または児童同士で言葉を交わす実際のコミュニケーション活動が不可欠である。1人1台の端末が整ったことで、ICT 機器を用いたコミュニケーション活動も可能となり、対人と ICT の両輪で児童の知識・技能の格差を補うことを目指した。また、より個々の考えや本当の思いが伝えられるように、段階に応じて複数の ICT 活用を組み合わせながら、児童が自分の考えをまとめていく過程を可視化することを目指した



写真1 学習の様子

(写真1)。

2. 実践内容

2.1 英語の音声、文字、語彙などを理解し活用する

今までの英語学習では、教師がフラッシュカードを見せながら単語導入を行ったり、単語力の向上を図ったり

する方法が定番であった。

しかし、1人1台の端末が整ったことによって、フラッシュカードを学習者の端末に配布することが可能となった。授業の1時間目では Quizlet を使用し、単語カードに音声を入れ込むことで、単語を何度も聞くことができるようにしたり、分からなかったものについては星印を付けて復習ができるようにするなど、児童が自分のペースで単語の定着を目指す学習が行えるようにした。また、マッチというゲームで、初頭音と頭文字を結び付ける機会を増やし、無意識のうちにスペルを目で捉える機会を作った(写真2)。



写真2 Quizlet

2.2 教科連携で真の情報に触れる

続く時間では、3年生の社会科「町探検」で散策した学校のまわりにある施設について振り返る機会を設けた。地図上にある施設について英語で理解し、地図記号を探



三軒茶屋郵便局
Google Earth より

写真3 教科連携の流れ

【本時の学習内容】

- 実施時期・学年 令和3年6~7月 6年生 児童数106名
- 指導目標/住みやすい町を作るために、自分の理想の町にあるものやそこでできることなどを発表する。
- 評価/住みやすい町を作るために、自分の理想の町にあるものやそこでできることなどを、自分の考えを含めて、相手に伝えるように発表することができる。

【指導略案】

- 単元指導計画(全体時間8時間)
- (1) 地図記号を振り返り、英語での言い方を知る。(1時間)
- (2) 先生の話聞いて、町にあるものやないもの考える。(1時間)
- (3) 町にあるものやそこでできること、町にないものや欲しいものなどを聞いたり、伝えたりする。(1時間)
- (4) 住みやすい町をつくるために、自分の理想の町を考える。(1時間)
- (5) 住みやすい町をつくるために、自分の理想の町について伝えたいことを書いてみる。(1時間)
- (6) 自分の理想の町について伝え、修正のアドバイスをもらう。(1時間)
- (7) 相手に伝えるように、自分の理想の町を伝える。(1時間)
- (8) 友達理想の町について読む。(1時間)

学習活動	子供活動	指導上の留意点
地図記号の復習やアイコンの紹介	社会科で学習した地図記号や、アイコンなどの言い方を英語で答える。	いろいろな英語表現をまとめて聞かせ、その中で意味を推測させるように導く。
身近な町にあるものやないものや欲しいものなどを考える。	身近な町にあるものやないもの聞き取り、できることや欲しいものなどを聞いて考える。	聞き取りが難しい児童を援助し、情報を聞き取って反応している児童を褒める。
世界の町に目を向ける。	世界の町の情報から何を考えたか、ロイロノートのスライドに書いて提出する。	聞き取って考え、英語や日本語で反応している様子を見取る。
発表練習活動及び発表活動	ループリックを作成する。また、それをもとに、発表内容の修正及び個人での発表練習を行う。発表活動では、役割分担をして協力して発表を行う。	ループリックをもとに、具体的な例を見せる。よし悪しだけでなく、発表内容の深まりを求めて、どうすれば良いか、3観点から考えさせるように導く。

したり、英語で言ったりする活動を行った。しかし、小学生にとって実際にその建物のイメージを記憶から引き出すことは難しい。そこで、Google Earth を使用し、建物の外観や、そこにたどり着くまでのルートを映像で確認することによって、よりリアルな情報と英語を結び付けられるようにした（写真3）。

2.3 世界と世界の課題に目を向ける

さらに、「住みやすい町を作るために」という目的で学習を進めていくにあたり、身近な町だけでなく世界の町に目を向ける機会を作りたいと考えた。そこで、再度 Google Earth を活用し、教師が実際に訪れたことのある世界の町を見せた。その後、その町の写真をスライドで共有しながら英語で語り、児童からの質問に英語で答えるなど、より児童が世界に目を向ける機会を設けた。また、活動終了後には、ロイロノートのスライドを使って、他の国の写真を見た感想や、日本の現状と比較しながら、自分が住みたい町がどのような町なのか考えを記述し、児童同士で感想を共有する時間を設けた（図1）。

「私たちが使っている水道水は綺麗で、飲んでも大丈夫だけれど、汚染されている川の水を水道水として使っている人がいます。また、衣食住が確保できていない人や1日に食べられる量が限られている人などがあることを知り、私たちが恵まれていることが分かりました。

貧困や環境汚染が無く、全ての人が平等にそれぞれ思いやりを大事にできる町にしたいです。」

図1 児童の感想

2.4 考えの可視化と整理、及び英語の修正

単元の後半では、「自分が住みやすいと思う理想の町」の発表に向けて、準備活動で ICT を活用した。まずは、教師が MetaMoji Classroom を使用して町のベースとなる地図記号や SDGs のアイコンをのせた白地図を作成し、ロイロノートを使って児童に配布した。児童はそれらを使用してロイロノート上で自分の住みたい町をデザインしていった。図2は、児童4名の考えを比較したものだ

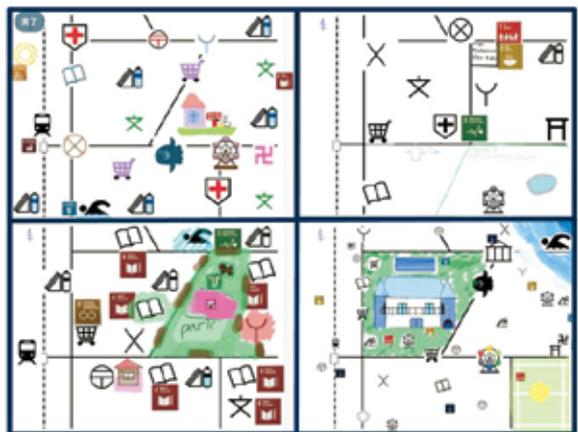


図2 理想の町（4名の比較）

が、それぞれが考える住みたい町の違いが一目で分かる。友達の作成した町の地図を見た上で英語を聞いたり、読んだりすることで、英語の単語や表現の誤りなどに気付くことができる。互いにアドバイスし合って修正をかけるなど、ICT の使用で考えが可視化されたことで、言語・内容ともに深めることができた（図3）。

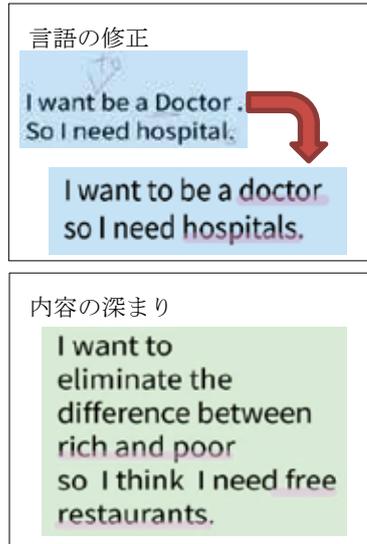


図3 児童の英文

3. 実践の成果

自分の伝えたい内容をクラスメートと共有することで、自分では気付かなかった英語の誤りに気付いたり、正しい英語表現を互いに教え合ったりする機会となった。間違えることは怖いことではなく、人のものを見ることで学ぶ（真似ぶ）ことにつながるという感覚が育まれたようである。さらに、自分の思いがより相手に伝わるようにするためには、どのような単語や表現を用いれば良いかをより深く考えられるようになるなど、考えの可視化によって、言語学習における主体性も育まれた。また、単元最後の発表活動に向けては、タブレットを使用して児童と一緒にルーブリックの作成も行った（写真4）。児童らで話し合っ ABC の基準を決めたことにより、課題を自分事として捉えることにも繋がったようであった（図4）。



写真4 ルーブリック作成

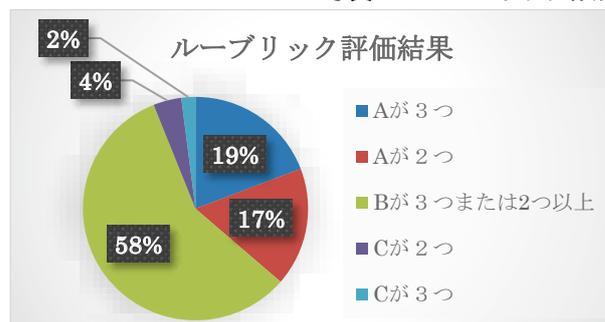


図4 ルーブリック評価結果

4. 今後に向けて

今回は、教師が先導しながら、単元内の活動に合わせて複数のアプリを使用してきた。今後は、児童個々の興味・関心や英語力に合わせて児童自らが学びたい課題を設定し、その達成に向けて多様な ICT 活用が見られるような、児童主体の英語授業を目指していきたい。